

水稻の収穫量調査等に関する検討会（令和８年度）議事概要

1 開催日時：令和８年９月８日（火） 15:30～17:30

2 開催場所：農林水産省 大臣官房統計部第１会議室

3 出席者：【構成員】

齊藤邦行委員、酒井英光委員、山岸順子委員、
吉本真由美委員、和田晃委員

【事務局】

大臣官房統計部長、生産流通消費統計課長 ほか

【オブザーバー】

福島県庁、富山県庁、滋賀県庁、岡山県庁

4 議事

気象推移等による水稻生産への影響及び水稻の収穫量調査等の取りまとめに当た
るの留意事項

5 議事概要

資料を基に令和８年産水稻の８月15日現在における10a 当たり収量の平均比見込
み及び前年比見込みの結果、本年の気象の推移等について事務局から説明し、各構成
員から御意見を聞いた。

各構成員からの主な御意見は、以下のとおり。

（１）気象状況や生産技術動向等から見た今年の10a 当たり収量への影響及びその見方

- ・ 令和８年は、過去３年間（令和５～７年）の記録的高温と比べると気温が低いもの
の、夏季の日本の平均気温は平年より1.02℃高く、地域による気象条件の差が大き
い年となった。北日本及び西日本では平年を1.2℃上回り、東日本では0.8℃上回っ
た。
- ・ 北海道・東北では気温が平年より高く推移し、日照にも比較的恵まれていたため、
活着や分けつは概ね順調だったと考えられる。また、６月以降は日照時間が平年を
上回る地域が多く、多照条件に恵まれたため、生育初期の分けつは概ね良好であり、
もみ数確保に有利な条件であったと考えられる。
- ・ ７月以降、全国的に高温傾向が顕著となり、東日本及び西日本では平年を上回る気
温が継続した。西日本を中心に記録的な高温となり、生育は急速に進み、多くの地
域で出穂期は平年よりやや早まったと考えられる。西日本では中旬及び下旬に1946
年の統計開始以降１位の高温を記録し、北日本でも中旬として１位タイの高温とな
った。

- ・ 7月 は、九州では記録的高温・少雨となり、水田によっては渇水によるもみ数不足や出穂阻害・遅延が生じたと考えられる。
- ・ 九州北部では平均気温が30℃を超えており、8月下旬に出穂期を迎えた府県では高温不稔発生の可能性がある。また、9月の高温程度によっては高温障害の発生が懸念される。
- ・ 8月以降も全国的に気温は平年並みか高いと予想されていることから、登熟期の高温による品質低下や粒厚への影響、高温不稔の発生状況について注視する必要がある。特に西日本では7月以降の高温・少雨傾向が顕著であり、収量及び品質への影響を十分確認する必要がある。
- ・ 関東から西日本にかけては、6月に梅雨前線等の影響を頻繁に受け、降水量が多く日照時間が少ない状態が続いた。特に、関東・東海の太平洋側や、近畿・中四国・九州では、日照不足が顕著で、分けつや初期生育がやや抑制された可能性がある。
- ・ 東日本では茨城県に上陸した台風15号や令和8年8月千葉豪雨、北陸などにおける大雨の影響により降水量が平年を上回った。線状降水帯などによる千葉や北陸などでの記録的豪雨による冠水や倒伏被害が発生した。一方で、西日本では7月以降降水量が少なく、渇水が継続している地域も少なくない。
- ・ 地域によっては局地的な大雨や渇水が発生しており、これらが生育や収量に及ぼす影響については引き続き注意が必要である。
- ・ 高温、渇水、豪雨による収量及び収量構成要素（穂数、もみ数等）への影響については今後も注視する必要がある。また、高温耐性品種導入の効果を考慮しつつ、高温による障害粒発生や高温不稔についても見定める必要がある。
- ・ 斑点米カメムシ類、イネカメムシ、いもち病、紋枯病の発生が多いと予測される地域では、品質及び収量への影響に留意する必要がある。斑点米カメムシ類については全国の多くの地域で注意報が発表されており、防除への注意が必要である。
- ・ 斑点米カメムシ類の発生が、東北、関東、甲信、北陸、東海、近畿、中国、四国及び北九州の一部で多くなると予想されているが、令和2年のような大発生には至らないとみられる。近年の発生予察情報等にしながら、対処的薬剤防除を適期に行うよう指導が行き届き、現状斑点米の多発による等級の低下は小さいと予測される。多発生が見られた場合は、色選機を導入している生産者も多く、選別作業が不可欠となる。

（２）水稻の収穫量調査等の実施に当たっての留意事項

- ・ 茨城県に上陸した台風15号や千葉豪雨、福井県、石川県、富山県、群馬県、北海道東部、青森県、秋田県等における線状降水帯による大雨の影響により、冠水被害や倒伏の発生がみられており、収量にどの程度影響するのか評価する必要がある。
- ・ 8月以降も全国的に高温が予想されていることから、高温登熟による品質低下、粒厚への影響及び高温不稔の発生状況について地域差を含めて把握する必要がある。

特に西日本では収量及び品質への影響を十分に確認する必要がある。

- ・西日本（特に九州）で、出穂期の高温による開花期高温不稔の発生、登熟期の高温による品質低下について、引き続き注意が必要。
- ・降水量は東日本・北日本では多かったが、西日本では渇水となった地域が多かった。西日本においては、高温による出穂期の不稔発生と登熟期の障害粒の発生、高温と渇水による千粒重低下や障害粒の発生助長など特に整粒歩留まりに関わる事項に留意する必要がある。
- ・酷暑日が続出した地域では高温不稔の発生による登熟歩合低下も予測される。
- ・斑点米カメムシ類については、広域的に発生量が多いと予想されていることから、減収や品質低下への影響について実態把握に努める必要がある。

（３）その他（本年の生育で特徴的な事柄等）

- ・本年は、ここ数年に比べ記録を更新するような高温ではないが、生育期間を通して高温は継続しており、加えて渇水や豪雨の局地的な集中が見られた。今後これらは継続すると思われ、品質・収量への影響を引き続き注視していく必要がある。
- ・令和８年夏（６～８月）の日本の平均気温は平年値より1.02℃高く、昨年ほどではないものの、夏季の高温は常態化する傾向にある。高温条件は多照となる傾向にあり、本年も収量への大きなマイナス要因とはなっていない。
- ・高温障害による一等米比率の低下については高温耐性品種への転換で対応されているが、西日本では高温耐性が弱い「ヒノヒカリ」の栽培面積が大きく、９月の気温によっては一等米比率の低下が懸念される。また、九州地域では高温耐性品種への転換が進んでいる。
- ・気候変動の進行に伴い高温年が常態化しつつあることから、高温耐性品種の導入拡大や高温条件下に対応した栽培管理技術の確立が一層重要となっている。
- ・高温に加え、短時間強雨や渇水など降水パターンの変化による影響について、地域ごとに十分な確認が必要である。
- ・温暖化とエルニーニョ現象、日本の南に形成された低気圧性循環（モンスーンジャイア）等の影響により、日本付近は例年と異なる気圧配置や気温分布となっており、異常気象条件下での生育への影響を解析しておく必要がある。